

少数言語復興に日本アニメが果たす役割

—— スペイン・ガリシア自治州の場合 ——

柿原 武史*

1. はじめに

近年、日本のアニメーション（以下アニメ）は世界各地で人気を得ており、原作であるコミックや関連ゲームソフト、キャラクター商品などとともに、日本発のポップカルチャーとしてある程度の地位を確立したように見受けられる。経済産業省の資料によると、「世界のテレビアニメ放送の 6 割は日本製」（経済産業省 2004：2）であり、代表的な成功例である「アニメ『ポケットモンスター』は、テレビ放送 68 カ国、映画 46 カ国にて上映」（経済産業省 2004：3）されるに至っている。特に欧州諸国では、日本アニメは 1970 年代からテレビで放映されており、子供向け娯楽番組として広く浸透しているといえる。

本稿で取り上げるスペインも例外ではなく、1970 年代以降多くの日本アニメがテレビで放映されてきている。1975 年にスペイン国営放送 TVE で『アルプスの少女ハイジ (Heidi)』が放映されたのに続き、1976 年には『母をたずねて三千里 (Marco)』が放映され人気を博した。その後 1978 年に放送が開始された『マジンガー Z (Mazinger Z)』により、日本アニメは子供たちを中心に幅広い層の支持を得ることとなった。

* 福岡大学人文学部外国語講師

1980年代には、アメリカ合衆国で製作されたアニメが大量に流入し、人気の座を奪われることになったが、1985年前後に開局した自治州テレビや民放テレビ各局が有力コンテンツとして日本アニメに注目したこともあり、1990年代以降、再び日本アニメブームが訪れ、その人気は定着し、現在に至っている。

本稿で注目するのは、自治州テレビが日本アニメを国家の公用語であるスペイン語ではなく自治州の公用語である地方の少数言語に吹き替えて放送を行っている点である¹。子供たちに人気のアニメキャラクターが少数言語を話すことは、子供たちにどのような印象を与えているのだろうか。また、少数言語復興を目指す言語政策にとってどのような影響があるのだろうか。本稿では、ガリシア自治州におけるガリシア語復興政策とガリシア語に吹き替えられた日本アニメとの関係について考察する。

2. ガリシア語の現状とその復興政策

まずは、本稿で取り上げるガリシア語がどのような言語で、民主化以降のスペインおよびガリシア自治州においてどのような言語政策が採られてきたのかを概観したい。

2.1. ガリシア語とは

ガリシア語は9世紀以降に俗ラテン語から派生したロマンス諸語の一つで、ポルトガル語と共通の起源を有する言語である。スペイン北西部、ポルトガルの北に位置する A Coruña, Lugo, Ourense, Pontevedra² の4県からなるガリシア自治州（面積：29,574 平方キロ）を中心に話されている。スペイン語と

¹ 自治州テレビ局による自治州公用語による吹き替え作品の代表例としては『ドラえもん (Draemon)』、『クレヨンしんちゃん (Shin Chan)』などがある。

² カスティーリャ語表記ではそれぞれ La Coruña, Lugo, Orense, Pontevedra である。

して知られるカスティーリャ語とともに同自治州の公用語である。カスティーリャ語以外のスペインの公用語の中で、第一言語としての話者人口が最も多いのはカタルーニャ語（約 475 万人³）であり、ガリシア語（約 160 万人）がそれに続く。一方、ガリシア自治州内にはカスティーリャ語を第一言語とする者や日常的に使用している者であってもガリシア語を話すことができる者が多い。彼らを含め、ガリシア語を話すことができる者は約 240 万人も存在しており、ガリシア自治州の人口約 270 万人（2001 年国勢調査）の 9 割近くに達している。このように自治州内人口に対して話すことのできる人の割合が 9 割近くにも達している公用語は他にない⁴。このことからわかるように、ガリシア語は公的な地位を保証されている上、自治州内の話者人口比率が非常に高い言語である。

2.2. スペインとガリシア自治州における言語政策

1975 年のフランコ没後、独裁体制が終わりスペインは民主制へと移行し、1978 年に民主憲法を制定した。同憲法の下、それまでの行き過ぎた中央集権体制を改め、地方自治州に大きな権限を与える政策が採られることとなった。言語に関しても、カスティーリャ語による国家の言語的統一を目指す方針を改めた。つまり、同憲法は第 3 条で言語的多様性を尊重するとともに、自治州単位で少数言語⁵を公用語として定めることを認めたのである。その結果、スペインは 17 の自治州と 2 つの特別自治市から構成される自治州国家となり、6 自治州⁶がそれぞれの自治憲章で国家の公用語であるカスティーリャ語とともに

³ カタルーニャ自治州、バレアレス諸島、バレンシア自治州における第一言語話者総数。

⁴ Siguan (2001: 39) によるとカタルーニャ語が話せる人の割合はカタルーニャ自治州で 79.1%、バレンシア自治州で 55.6%、バレアレス諸島で 71.7%、バスク語を話せる人の割合はバスク自治州で 28.6%、ナバラ自治州で 15.6%である。

⁵ 1978 年憲法および各自治州の自治憲章では地方の少数言語を「固有語」という用語で表現しているが、本稿では同じ意味で少数言語という用語を用いる。

⁶ ガリシア、バスク、ナバラ、カタルーニャ、バレアレス諸島、バレンシアの 6 自治州。

に少数言語を公用語として定めた。

ガリシアは1981年に自治憲章を制定し、自治権を獲得した。同自治憲章はカスティーリャ語とガリシア語を自治州の公用語に定めた⁷。1983年には、ガリシア言語正常化法が制定された。これは、長年の間にカスティーリャ語によって取って代わられたガリシア語の使用を回復することを目指した法律である。これによりガリシア語は地方行政およびその附属機関における公式言語とされ、教育においてもガリシア語の使用が規定された。

ガリシア言語正常化法は、全6編から構成されており、前文において、ガリシア語は「我々のアイデンティティに不可欠な核」であり「我々の共同体の内部に連帯感をもたらす真の精神的力である」と定義し、ガリシア語の公的な場での使用に関して規定し、その回復（正常化）の必要性を謳っている。第1編ではガリシアにおける言語権について、第2編では立法、行政、司法といった公的な場でのガリシア語の使用について定めている。第3編では教育、第4編ではマスメディアにおけるガリシア語の使用についてそれぞれ規定し、第5編ではガリシア自治州外のガリシア語話者へのサービス提供や、隣接地域でのガリシア語の使用についても言及している。第6編では言語正常化に関して自治政府が果たすべき職務について定めている。

2.3. ガリシア語復興政策の現状

ガリシア言語正常化法に基づき、様々な法令が整備され、行政機関などにおけるガリシア語使用は一般化し、様々な問題を抱えつつも、教育におけるガリシア語の使用も拡大し、一部ではその成果が現れている。例えば、Seminarario de Sociolingüística (1994, 1995) のデータによると、ガリシア語の読み書き能力が、若い世代で向上している⁸。しかし、若年層でガリシア語を第一言語

⁷ 1981年4月6日に施行された自治憲章は、第5条でガリシア語をガリシア固有の言語と規定し、ガリシア語にカスティーリャ語とともに公用語の地位を与えた。

⁸ ガリシア語の「読む」能力に関して、「大変良く」あるいは「良く」読むことができると

とする者の割合（38.9%）が全世代（62.4%）に比べて低く、日常言語としてカスティーリャ語を使用する若年層の割合（53.4%）が全世代（31.4%）に比べて高くなっていることから、若年層では第一言語、日常使用言語ともにカスティーリャ語化が進んでいるのも事実である。そのため、カスティーリャ語と同等の地位にまでガリシア語の地位を引き上げるという意味でのガリシア語復興のためには、現行のガリシア語教育だけでは限界があるといえる。今後は、ガリシア語のイメージを向上するための教育を実施し、学校以外の社会でもガリシア語使用を増やし、若者がガリシア語を使用するための動機付けを行っていく必要があるだろう⁹。

3. 日本アニメとガリシア語

マスメディアにおけるガリシア語使用は、ガリシア語教育と並ぶガリシア語復興政策の重要な施策のひとつである。なぜならマスメディアは、ガリシアの多くの人々が日常的に触れており、彼らの言語使用に少なからぬ影響を与えていると考えられるからである。本節では、まずマスメディアにガリシア語が導入されていった経緯を概観する。次に、子供たちの多くが視聴し、若者の言語使用に大きな影響を与えていると考えられる日本アニメのガリシア語吹き替えについて、その現状を考察し、日本アニメや外国映画の吹き替え言語に対する若者の意識について考察する。

3.1. マスメディアの普及とガリシア語の周辺化

フランコ独裁政権下では言論の自由が制約され、カスティーリャ語以外の言

回答した者の割合は、全世代の 45.1% に対し、16～25 歳の若年層では 72.6% に達しており、「書く」能力に関しても、「大変良く」あるいは「良く」書けると回答した者の割合は、全世代の 27.1% に対し、16～25 歳では 63.9% に達している。

⁹ 拙稿（2006）、（2007）は、ガリシア語教育の成果や若者の言語に対する意識などに関してより詳しい考察を行っている。

語の使用が制限されていた。そして、1930年代に新たな音声メディアであるラジオが出現し、50年代に普及したことで、カスティーリャ語の普及が決定的になり、その地位は不動のものとなった。特にガリシア地方では、識字率が低く、いわゆる山村や僻地に住む住民への印刷メディアの普及も困難であったため、ラジオの普及は急速に進み、それに伴いカスティーリャ語が家庭内に入っていくことになった。

テレビの出現は、人々のマスメディアとの接触機会を急速に拡大する役割を果たしたが、ガリシアの場合も例外ではなかった。スペインでは1956年に国営テレビ放送（Televisión Española：TVE）が始まったが、ガリシアにおいては1961年にオウレンセとサンティアゴで放送が開始された。1964年にはスペイン全体でテレビを保有している家庭は36%に過ぎなかったが、その数は年々増加していった（Portas Fernández 1997：40）。1991年に発表された『ガリシア文化地図3（*Mapa Cultural de Galicia III*）』（Xunta de Galicia 1991）によると、ガリシア自治州の人口の2.5%がテレビを保有しておらず、20%が家に2台のテレビを所有していることがわかった。つまり97.5%がテレビを1台以上所有しており、ガリシア自治州のほぼ全ての家庭にテレビが普及しているのである。このようなラジオとテレビの普及に伴い、1950年代以降カスティーリャ語が急速に家庭内に浸透していったのである。

3.2. マスメディアへのガリシア語の導入

1975年にフランコ独裁政権が終わり、1978年に制定された憲法では言論と表現の自由が保障されている（第20条）。第20条第3項では少数言語集団への配慮がなされている。

1983年に制定されたガリシア言語正常化法は、ガリシア語の公的な場、教育、行政での使用の他、マスメディアにおける使用に関しても第4編第18条～第20条で規定している。第18条では、「ガリシア語はガリシア自治州が運営

する、あるいは同自治州の管轄下にあるメディアでの常用言語である」と定められており、第 19 条では、それ以外のメディアにおいても、ガリシア語を使用するものに対しては「経済的、物質的援助を行う」と定められている。また、第 20 条は、以下のようにメディアにおけるガリシア語普及のためにガリシア自治政府が果たすべき責務についても規定している。

第 20 条

以下はガリシア自治政府の義務である。

1. ガリシア語による映画の制作、吹き替え、字幕付け、公開、またその他の視聴覚メディアの促進。
2. ガリシア語による文化表現、演劇および催事の活性化。
3. 出版および普及を強化する方策によって、ガリシア語による書籍の振興に貢献すること。

これによると、マスメディアだけではなく、あらゆる文化的事業におけるガリシア語使用の促進に対する支援を自治政府が行うこととなっている。ここでは、主に新聞、ラジオ、テレビといったマスメディアにおけるガリシア語使用を中心に論じていく。

3.2.1. 新聞におけるガリシア語使用

まずは伝統的なマスメディアである印刷メディアだが、ガリシア語のみの日刊紙は 1994 年の *O Correo Galego* の登場まで待たなければいけなかった。それ以前は、週刊の新聞 *A Nosa Terra* が唯一ガリシア語のみで発行されている定期行物であり、それ以外はガリシアで編集される日刊紙の一部の記事でガリシア語が使用されているに過ぎなかった。

Goyanes Vilar 他が 1990 年および 93 年に実施した調査によると、ガリシア

で編集されている日刊紙におけるガリシア語の使用割合は、表1の通りである。

表1 ガリシアで編集されている日刊紙におけるガリシア語使用率

新聞名	1990年	1993年
La Voz de Galicia	5.39%	4.13%
El Correo Gallego	9.07%	5.08%
Faro de Vigo	2.98%	2.47%
La Región (Ourense)	3.61%	2.97%
Diario 16 de Galicia	3.24%	2.73%
El Ideal Gallego	3.01%	1.35%
El Progreso (Lugo)	2.63%	3.42%
Diario de Pontevedra	2.96%	2.34%
Atlántico Diario	4.20%	2.73%
平均	4.12%	3.02%

出典：Goyanes Vilar et al. (1996) を基に作成

これを見ると、ガリシアで編集されている新聞におけるガリシア語の使用率は非常に低いことがわかる。また、これらガリシアで編集されている全新聞のガリシア語使用率の平均値は1990年の4.12%から93年の3.02%へと低下しており、新聞におけるガリシア語使用が減少傾向にあることがうかがえる。こうした状況下、1994年1月に全面的にガリシア語を使用した日刊紙 *O Correo Galego* が誕生した。これは、Editorial Compostela 社がカスティーリャ語で発行している *El Correo Gallego* 紙の姉妹紙で、2003年5月に *Galicia Hoxe* と改称されている。

但し、2003年のガリシア自治州における日刊紙普及率は14歳以上の住民の47.4%に達するが、新聞販売部数は1日平均約30万部¹⁰ (IGE) に過ぎず、スポーツ紙を含む全国紙がかなりの割合を占めている¹¹。当然これらは全てカスティーリャ語で発行されている。そのため *Galicia Hoxe* は唯一のガリシア語のみによる日刊紙という意味での存在意義は大きいですが、(データは公表されていないもの

¹⁰ IGE (2005) には、1999年の292,257部が最新データとして掲載されている。

¹¹ AIMC (2005) によると、スペインで最も読者の多い新聞はスポーツ紙の *Marca* (255万人)、次いで一般紙の *El País* (219万人)、一般紙 *El Mundo* (139万人) である。

の) 普及率は低く、実際の影響力はそれほど大きいとは考えられない。

3.2.2. ラジオ・テレビにおけるガリシア語使用

1981年のガリシア自治憲章第34条では、ガリシア自治州における独自のラジオ放送とテレビ放送の設立が自治政府の責任下で行われると規定されている。これに基づき1984年7月11日にはガリシア自治州議会でCRTVG（ガリシア・ラジオ・テレビ会社）設立法¹²が承認された。同社は1985年2月24日にガリシア自治州全域を放送エリアとするガリシア語によるラジオ局Radio Galegaの放送を開始し、同年7月24日にはガリシア語によるテレビ局TVGの放送を開始した。

表2はガリシア自治州のほぼ全域で聴取できる主要放送局とその主な使用言語を示したものだが、これを見れば、ラジオ放送全体におけるガリシア語の存在が如何に少なく限られたものであるかがわかる。

表2 ガリシア自治州全域で聴取可能な主要ラジオ局とその使用言語

ラジオ局名	主な使用言語
Radio Galega	ガリシア語
Radio Nacional de España (1, 2, 3, 5)	カスティーリャ語
Cadena SER	カスティーリャ語
Cadena COPE	カスティーリャ語
Cadena 100	カスティーリャ語
Onda Cero	カスティーリャ語
Antena 3	カスティーリャ語
M 80	カスティーリャ語
Los 40 Principales	カスティーリャ語
Cadena Dial	カスティーリャ語
Radio Compostela	カスティーリャ語

Maneiro Vila (1993:55) および Portas Fernández (1997:193) を基に作成

次に、テレビにおけるガリシア語使用についてだが、先に述べたように、国

¹² Lei 9/1984, do 11 de xullo, de creación da compañía de radio televisión de Galicia.

営放送のテレビ TVE は、ガリシアでは 1961 年にオウレンセとサンティアゴで放送を開始した。当初、テレビでの使用言語はカスティーリャ語のみであったが、国営放送テレビのガリシア支局は、1985 年 1 月からテレビ第 1 チャンネルの一部の時間をガリシア語放送に充てた。

1985 年 7 月 24 日に自治州が運営するガリシア語によるテレビ局 TVG が開局したが、開局前に期待が高まったこともあり、開局後は TVG で使用されるガリシア語を巡り大きな論争が巻き起こった。つまり TVG のアナウンサーや映画の吹き替えを行うスタッフが使用するガリシア語が、不自然であり、間違いが多いといった批判が市民やガリシア語普及団体などから表明されるようになったのである¹³。

1990 年には、ガリシア自治州において民間テレビ放送が開始され、テレビにおけるガリシア語を取り巻く環境は一転し、非常に困難な状況となった。つまり、国営放送の 2 つのチャンネル (TVE-1, TVE-2) の他に、Antena 3 と Tele 5 の 2 つの民間放送がカスティーリャ語で放送を開始したのである。これによりガリシアで視聴できる地上波テレビ放送の 5 つのチャンネルのうち 4 つでカスティーリャ語が使用される状態となり、テレビ全体におけるガリシア語の存在比率が大幅に低下した。こうした状況下、TVG のガリシア語に向けられた当初の批判は 1990 年以降鎮静化した (Maneiro Vila 1993:30)。

2004 年 2 月の時点で、ガリシア自治州で視聴できる通常の地上波テレビ放送のうち、ガリシア語の番組は一週間で合計約 160 時間であるのに対し、カスティーリャ語の放送は合計約 650 時間に達している。つまりガリシア語のテレビ番組は、全テレビ番組の 20% 弱に過ぎないのである。この他に有料放送である Canal + が週に約 160 時間カスティーリャ語による放送を行っている。

¹³ 例えば、1986 年 1 月 21 日付の Faro de Vigo 紙は「ガリシア語友の会 (Irmandades da Fala)」が「TVG で使用されているガリシア語は castrapo (ガリシア語化したカスティーリャ語、あるいはカスティーリャ語化したガリシア語) であると批判している」と題する記事を掲載した (Maneiro Vila 1993 : 23)。

また、90年代後半以降デジタル衛星放送やケーブルテレビなどの多チャンネル・サービスも普及しつつあるので、カスティールリャ語による放送の比率はますます高くなる一方である。

3.3. 日本アニメのガリシア語への吹き替え

このように、ガリシア自治州では1985年7月24日にTVGが開局し、ガリシア語による放送を行っているが、同局はガリシア自治州を中心とするニュースや情報番組の他は、外国映画やアニメの吹き替え放送が多い編成となっている。1994年4月から日本アニメを中心とした子供向け番組 Xabarín Club が放送され、現在まで様々な日本アニメが放映されてきた。他の民放や国営放送のテレビ局でもアニメや外国映画の吹き替えは多く放送されているが、いずれもカスティールリャ語で放送されている。表3は、2002年2月16日～22日の期間にガリシア自治州で放映された日本アニメとその使用言語の内訳である。

表3 ガリシア自治州で地上波テレビで視聴できる日本アニメ¹⁴ (2002年2月16～22日)

放送局	番組名	放映曜日	開始時刻	放映時間	使用言語	合計時間
TVG	Shin Chan	月～金	19:00	60分	ガリシア語	300分
TVG	Shin Chan	土	18:00	30分	ガリシア語	30分
TVE 2	Digimon	月～金	17:30	30分	カスティールリャ語	150分
Tele 5	Pokemon	土	7:30	30分	カスティールリャ語	30分
Tele 5	Hamutaro	土	8:30	30分	カスティールリャ語	30分
Tele 5	Pokemon	日	6:30	30分	カスティールリャ語	30分
Tele 5	Hamutaro	日	8:30	30分	カスティールリャ語	30分
Tele 5	One Piece	日	9:00	30分	カスティールリャ語	30分
Antena 3	Detective Conan	日	7:30	30分	カスティールリャ語	30分
合計放送時間：ガリシア語：300分(45.5%)、カスティールリャ語：360分(54.5%)						660分

これを見ると、TVGが月曜日から土曜日までガリシア語吹き替えにより日

¹⁴ 当時の番組表を参考に作成。

本アニメを放映していることから、ガリシア語で視聴できる日本アニメの割合が45.5%と非常に高くなっていることがわかる。この割合が如何に高いかは、同様に吹き替えによって放送されることが多い外国映画の放映言語をまとめた表4を見れば明らかだろう。

表4 ガリシア自治州の地上波テレビで視聴できる外国映画の使用言語¹⁵

言 語	本 数	割 合
カスティーリャ語吹き替え	29	72.5%
ガリシア語吹き替え	5	12.5%
多重（カスティーリャ語吹き替え＋オリジナル言語）	3	7.5%
オリジナル言語＋カスティーリャ語字幕	2	5.0%
オリジナル言語＋ガリシア語字幕	1	2.5%
合 計	40	72.5%

ガリシア自治州の地上波テレビ全局で、外国映画は週に40本も放映されるのだが、そのうちガリシア語に吹き替えられるものは12.5%の5本に過ぎないのである。

3.4. 日本アニメ視聴時の言語選択と意識

それでは、ガリシア自治州の人々は、実際に日本アニメや外国映画を視聴する際、ガリシア語とカスティーリャ語のどちらを好んで選択しているのだろうか。また、その言語を選択するのはどのような理由からなのだろうか。これらを明らかにすべく、以下では、筆者が現地において実施した調査の結果を分析していく。これにより、それぞれの言語や日本アニメに対してガリシアの人々が抱えている印象や考えを明らかにし、日本アニメのガリシア語吹き替えが、ガリシア語復興政策に果たす役割について考えてみたい。

¹⁵ 表3と同期間の2002年2月16～22日の番組表を参考に作成。

3.4.1. 現地中等教育機関における調査概要

調査方法はアンケート方式とし、2003年11月から2004年1月にア・コルーニャ県の公立中等教育機関37校に在籍する16～25歳の生徒とその保護者、および教員を対象に実施した。その結果、生徒1,145人、その保護者852人、教員367人から回答を得ることができた¹⁶。生徒に対する調査・質問項目は全部で42項目（保護者に対しては51項目、教員に対しては61項目）で、大きく分けて①第一言語と日常言語、②言語使用能力、③言語意識、④個人情報の4つの分野に分けられる。

拙稿（2007）は本調査の結果から、若者（中等教育機関在籍の生徒世代）の第一言語および日常言語はその保護者世代に比べるとカスティール語化していることを確認した。また、生徒世代の方がガリシア語の読み書き能力が高いことや、生徒世代の多くが、ガリシアにおける将来の言語使用は、カスティール語がより拡大していくと考えていることなども指摘した。そして、調査結果を地域ごとに比較したところ、生徒世代の第一言語、日常言語ともに、小規模集落と大都市の間には大きな差異があり、人口規模の大きい都市部ほどカスティール語化が進んでいることを確認した。また、言語使用の将来に対する意識調査の結果から、大都市ほどカスティール語をガリシア語よりも将来性のある有力な言語と考えている若者が多いとの結論に至った。これらから、都市圏と非都市圏との間に存在する言語使用と言語に対する意識の差異の大きさが、ガリシア語復興政策を困難にしている要因だと指摘した。

3.4.2. テレビ視聴時の言語選択

本アンケート調査では、マスメディア受容時に優先的に選択する言語について選択肢方式の質問を設けた。つまり、(1)新聞・雑誌、(2)ラジオ、(3)テレビの3つの媒体別にそれぞれを受容する際に優先的に使用する言語または当該メ

¹⁶ 有効回答率は生徒71.7%、保護者世代26.7%。教員に対しては任意に協力を求めた。

ディアで使用されている言語について「ガリシア語のみ使用」、「ガリシア語の方をよく使用」、「カスティーリャ語の方をよく使用」、「カスティーリャ語のみ使用」の4つの選択肢から1つ選択する方式とした。本稿では、主に若者の使用言語の実態を明らかにすべく、生徒世代の回答とその保護者世代の回答とを比較することとする。

表5～7は、調査結果を各媒体別にまとめたものである。表5を見ると、活字メディアである新聞・雑誌を読む際に優先的に使用する言語に関しては、生徒世代も保護者世代も約9割の回答者が「カスティーリャ語のみ使用」あるいは「カスティーリャ語の方をよく使用」と回答していた¹⁷。次に表6を見ると、いずれの世代でもラジオを聴取する際にはカスティーリャ語を使用する者が最も多いものの、保護者世代では生徒世代に比べて、ガリシア語使用を好む者が若干多いことが読み取れる¹⁸。

表7を見ると、テレビ視聴時の使用言語もラジオ聴取時と同様に、いずれの世代でもカスティーリャ語により視聴する者が最も多いものの、保護者世代の方が生徒世代に比べてガリシア語でのテレビ視聴を好む者が若干多くなっていることがわかる¹⁹。

¹⁷ 生徒世代の86.5% (990人)、保護者世代の87.4% (745人)が「カスティーリャ語のみ」あるいは「カスティーリャ語の方をよく」使用すると回答し、生徒世代の11.4% (131人)、保護者世代の10.7% (91人)が「ガリシア語のみ」あるいは「ガリシア語の方をよく」使用すると回答した。生徒世代と保護者世代のデータにカイ2乗検定を行ったところ、有意差は認められなかった(危険率0.05、 $p=0.809008983$)。つまり、新聞を読む際に使用する言語に関しては生徒世代も保護者世代もほぼ同様の使用言語の選択を行っているといえる。

¹⁸ 生徒世代の79.4% (909人)、保護者世代の69.6% (593人)が「カスティーリャ語のみ」あるいは「カスティーリャ語の方をよく」使用すると回答し、生徒世代の16.8% (192人)、保護者世代の22.4% (191人)が「ガリシア語のみ」あるいは「ガリシア語の方をよく」使用すると回答した。生徒世代と保護者世代のデータにカイ2乗検定を行ったところ、生徒世代と保護者世代との間には危険率0.01で有意差が認められた($p=0.00000044$)。

¹⁹ 生徒世代の92.0% (1053人)、保護者世代の83.7% (713人)が「カスティーリャ語のみ」あるいは「カスティーリャ語の方をよく」使用すると回答し、生徒世代の6.8% (78人)、保護者世代の15.3% (130人)が「ガリシア語のみ」あるいは「ガリシア語の方をよく」使用すると回答した。生徒世代と保護者世代のデータにカイ2乗検定を行ったところ、危険率0.01で有意差が認められた($p=0.000000008$)。

表5 新聞・雑誌を読む際に優先的に選択する言語

	ガリシア語のみ	ガリシア語の方をよく使用	カスティーリャ語の方をよく使用	カスティーリャ語のみ	その他、無回答	総計
保護者世代	4.6% (39)	6.1% (52)	44.6% (380)	42.8% (365)	1.9% (16)	852
生徒世代	3.1% (35)	8.4% (96)	56.9% (652)	29.5% (338)	2.1% (24)	1145

表6 ラジオ聴取時に優先的に選択する言語

	ガリシア語のみ	ガリシア語の方をよく使用	カスティーリャ語の方をよく使用	カスティーリャ語のみ	その他、無回答	総計
保護者世代	8.6% (73)	13.8% (118)	40.3% (343)	29.3% (250)	8.0% (68)	852
生徒世代	4.5% (52)	12.2% (140)	43.1% (494)	36.2% (415)	3.8% (44)	1145

表7 テレビ視聴時に優先的に選択する言語

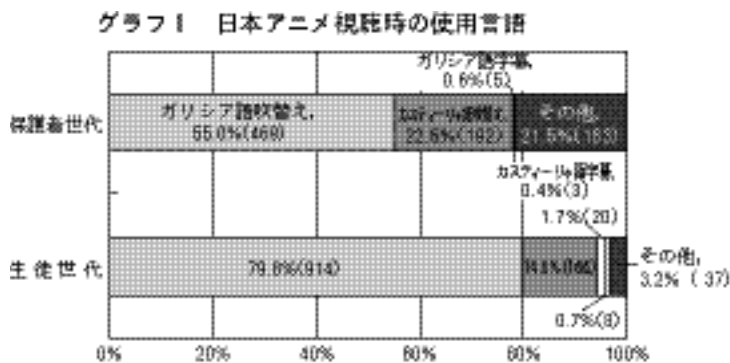
	ガリシア語のみ	ガリシア語の方をよく使用	カスティーリャ語の方をよく使用	カスティーリャ語のみ	その他、無回答	総計
保護者世代	3.8% (32)	11.5% (98)	65.6% (559)	18.1% (154)	1.1% (9)	852
生徒世代	1.7% (20)	5.1% (58)	71.7% (821)	20.3% (232)	1.2% (14)	1145

これらから、いずれの世代においても、新聞・雑誌、ラジオ、テレビといったマスメディアを受容する際、カスティーリャ語使用を選択する者が最も多いことがわかった。これは、いずれのメディアでもカスティーリャ語で提供されているものが圧倒的に多いという現実を反映しているためと考えられる。また、ラジオ聴取時とテレビ視聴時には、保護者世代よりも生徒世代で、カスティーリャ語使用を好む者がやや多くなっていることも判明した。

3.4.3. 日本アニメ視聴時の言語選択

以上、媒体別の使用言語の選択について考察を行ってきたが、本アンケート調査では、コンテンツ別にマスメディアを受容する際の使用言語の選択についての質問も設けた。ここでは、子供や若者に人気があるコンテンツである日本

アニメを視聴する際に優先的に選択する言語についてのデータを生徒世代とその保護者世代に分けて比較、分析してみたい。



グラフ1は、日本アニメ視聴時に選択する使用言語について生徒世代と保護者世代に分けてまとめたものである。これを見ると、生徒世代も保護者世代も過半数がガリシア語による吹き替えで視聴すると回答しており、生徒世代の方がガリシア語による吹き替えで視聴すると回答した者の割合が高くなっている²⁰。また、保護者世代には日本アニメの視聴経験がない回答者もいるためか、「その他」が21.5%に達している。日本アニメ視聴者の中心である生徒世代の大半(79.8%)がガリシア語による吹き替えでの視聴を好んでいることから、ガリシア語吹き替えは日本アニメの視聴言語としてガリシアの人々(特に若者)の間に定着していると結論付けることができる。なお、ガリシア語やカスティーリャ語の字幕付きの日本語音声での視聴を好むという回答も若干見られたが、現時点ではこうした形式で放映されている日本アニメは無いため、「仮に存在すれば」という前提での回答と考えられる²¹。

²⁰ グラフ1のデータにカイ2乗検定を行ったところ、日本アニメを視聴する際に生徒世代と保護者世代が選択する使用言語の間には危険率0.01で有意差が認められた($p=2.37671E-45$)。

²¹ 2004年2月16～22日の番組表によると、ガリシア自治州の地上波テレビ放送5つのチャ

このように、テレビを視聴する際は、生徒世代も保護者世代も8割から9割がカスティーリャ語を選択しているにもかかわらず、日本アニメを視聴する際には、生徒世代の79.8%、保護者世代の55.0%がガリシア語吹き替えを選択しているのは注目に値する。

3.4.4. 日本アニメ視聴時にガリシア語が好まれる理由

それでは、日本アニメを視聴する際に、なぜ上記のような使用言語の選択が行われるのだろうか。アンケート調査票には、回答者に日本アニメを視聴する際の使用言語を回答してもらったと同時に、その言語を選択する理由を自由回答の形式で記入してもらった。これを分析することにより、調査対象となった生徒世代および保護者世代が、ガリシア語とカスティーリャ語に対して、どのようなイメージを抱いており、日本アニメのガリシア語吹き替えが人々にどのように受け入れられているのかを明らかにしたい。なお、自由回答であるため様々な表現が用いられているが、ここでは類似した内容のものをまとめて、生徒世代と保護者世代に分けて表8、9のように分類した。

表8 ガリシア語吹き替えを選択する理由（生徒世代：914人）

人数 ²²	%	理 由
264	28.9	ガリシア語の方が面白いから
58	6.3	(子供の時から)習慣的にガリシア語で見ているから
60	6.6	ガリシア語が母語・日常言語・公用語だから
57	6.2	ガリシア語の方が良く理解できるから
51	5.6	日本アニメの多くは(TVGにより)ガリシア語に吹き替えられているから
45	4.9	ガリシア語の方がより身近(自然)に感じられるから
41	4.5	ガリシア語の方が吹き替え(翻訳)がうまくできているから

ンネルで、日本アニメはその45.5%がガリシア語による吹き替えで、54.5%がカスティーリャ語による吹き替えで放送されていた(表3参照)。

²² 自由回答であり複数回答も可能なため、重なる部分や2つ以上の回答が記述される場合もあるので、人数の合計は当該言語を選択した人数の合計とは一致しない。

31	3.4	ガリシア語の語彙・表現の方が美しく、特有の表現があるから
28	3.1	ガリシア語の方が（登場人物に）より愛嬌がある（好感が持てる）から
16	1.8	ガリシア語の声の方が良い（適している）から
10	1.1	ガリシア語の方が心地よいから
7	0.8	ガリシア語は登場人物、ストーリーを生き生きさせるから
95	10.4	理由はないがガリシア語吹き替えが好き
8	0.9	その他
123	13.5	無記入

表9 ガリシア語吹き替えを選択する理由（保護者世代：469人）

人数	%	理 由
140	29.9	ガリシア語の方が面白いから
43	9.2	ガリシア語の方が良く理解できるから
42	9.0	ガリシア語が母語・日常言語・公用語だから
23	4.9	ガリシア語の方が（登場人物に）より愛嬌がある（好感が持てる）から
21	4.5	ガリシア語の方がより身近（自然）に感じられるから
14	3.0	日本アニメの多くは（TVGにより）ガリシア語に吹き替えられているから
14	3.0	習慣的にガリシア語で見ているから
10	2.1	ガリシア語の語彙・表現の方が美しく、特有の表現があるから
7	1.5	ガリシア語の方が吹き替え(翻訳)がうまくできているから
6	1.3	ガリシア語の方が心地よいから
5	1.1	子供がガリシア語の方を好むため、子供が見る番組がガリシア語のため
2	0.4	ガリシア語は登場人物、ストーリーを生き生きとさせるから
1	0.2	ガリシア語の声の方が良いから
39	8.3	理由はないがガリシア語吹き替えが好き
13	2.8	その他
115	24.5	無記入

これらを見ると「ガリシア語の方が面白いから」という理由を挙げる者が、生徒世代、保護者世代ともに回答者の30%近くに達しており、最も多いことがわかる。生徒世代では「習慣的にガリシア語で見ているから」や「日本アニメの多くはガリシア語に吹き替えられているから」、あるいは「ガリシア語が母語・日常言語・公用語だから」といったやや消極的な理由が続いている。しかし、生徒世代も保護者世代も「ガリシア語の方が（登場人物に）愛嬌がある

（好感が持てる）から」や「ガリシア語の方がより身近（自然）に感じられるから」、「ガリシア語の語彙・表現の方が美しく、特有の表現があるから」、「ガリシア語の方が心地よいから」、「ガリシア語は登場人物、ストーリーを生き生きとさせるから」といった言語そのものを肯定的に評価する理由を挙げる者が多いことが特徴として指摘できる（表8～11では、言語そのものを肯定的に評価する理由を太字で示した）。

一方、日本アニメを見る際にカスティーリャ語による吹き替えを好むと回答した者が挙げた理由を同様に表10、11にまとめた。

表10 カスティーリャ語吹き替えを選択する理由（生徒世代：166人）

人数	%	理 由
67	40.4	カスティーリャ語の方が良く理解できるから
23	13.9	（子供の時から）習慣的にカスティーリャ語で見ているから
12	7.2	好きな番組（多くのアニメ）はカスティーリャ語吹き替えで放送されているから
9	5.4	カスティーリャ語が母語・日常言語だから
6	3.6	ガリシア語の語彙・表現の方が美しく、特有の表現があるから
5	3.0	カスティーリャ語の方が面白いから
4	2.4	カスティーリャ語の方が身近（自然）に感じられるから
3	1.8	カスティーリャ語の方が吹き替え（翻訳）がうまくできているから
1	0.6	カスティーリャ語の方が心地よいから
20	12.0	理由は無いがカスティーリャ語吹き替えが好き
5	3.0	その他
25	15.1	無記入

表11 カスティーリャ語吹き替えを選択する理由（保護者世代：192人）

人数	%	理 由
65	33.9	カスティーリャ語の方が良く理解できるから
13	6.8	習慣的にカスティーリャ語で見ているから
15	7.8	カスティーリャ語が母語・日常言語だから
8	4.2	カスティーリャ語の方が吹き替え（翻訳）がうまくできているから
5	2.6	カスティーリャ語の方が面白いから

5	2.6	カスティーリャ語の方が心地よいから
3	1.6	多くの番組はカスティーリャ語吹き替えで放送されているから
3	1.6	カスティーリャ語の語彙・表現の方が美しく、特有の表現があるから
2	1.0	子供がカスティーリャ語を好むから
1	0.5	カスティーリャ語の方が（登場人物に）より愛嬌がある（好感が持てる）から
16	8.3	理由は無いがカスティーリャ語吹き替えが好き
6	3.1	その他
57	29.7	無記入

これを見ると、生徒世代、保護者世代ともに「カスティーリャ語の方が良く理解できるから」や「習慣的にカスティーリャ語吹き替えで見ているから」といった理由が多いことがわかる。つまり、カスティーリャ語が国家の公用語として教育で使用されてきたことや、マスメディアにおける存在が圧倒的であるため、カスティーリャ語を選んでいうやや消極的な理由が上位を占めているのである。そのため、カスティーリャ語そのものを肯定的に評価する理由（表中の太字で示した理由）を挙げる者はそれほど多くはない。

これらをまとめると、3.3 で見たように日本アニメはガリシア語による吹き替えが多く存在しているという事実もあるが、それ以上に、ガリシア語が日本アニメの吹き替えに適していると考える者が多いため、ガリシア語吹き替えが好まれているといえそうである。特に、ガリシア語の方が日本アニメの「面白さ」をより適切に伝えることができ、ガリシア語を話すアニメのキャラクターの方がより「身近に」感じられ、カスティーリャ語を話すキャラクターよりも「親しみ」や「愛嬌」があるという印象を抱かせている点は注目に値するだろう。これは、ガリシアの人々が、ガリシア語に対して「身近さ」や「親しみやすさ」を感じていることの反映であると考えられる。また反対に、日本アニメのガリシア語吹き替えは、若者を中心として多くの人々に、ガリシア語を更に身近に感じさせられる可能性を秘めており、ガリシア語復興政策において非常に大きな役割を果たすだろう。

3.4.5. ガリシア語吹き替えが抱える課題

しかし、先にも見たように、生徒世代も保護者世代も、日本アニメ以外のテレビ番組はほとんどカスティーリャ語で視聴しているのが現状である。それは、チャンネル数や放送されている番組の量が、カスティーリャ語によるものの方が多からという理由もあるが、日本アニメ以外の番組には、カスティーリャ語の方が適していると考える者が依然として多いためでもある。

本アンケート調査では、外国映画をテレビで視聴する際に優先的に選択する言語についての質問も設け、その理由も尋ねた。それによると、テレビで外国映画を視聴する場合は、日本アニメを視聴する場合とは対照的に、カスティーリャ語による吹き替えでの視聴を好む者が多く、いずれの世代においても8割程度に達していた²³。また、いずれの世代においても、外国映画を視聴する際にガリシア語吹き替えを好むと回答した者の多くが、ガリシア語が「母語・日常言語・公用語だから」や、「ガリシア語吹き替えの方がよく理解できるから」という理由を挙げていた。つまり、ガリシア語そのものを肯定的に評価する理由を挙げたのは、生徒世代、保護者世代ともに少なかったのである。このことはカスティーリャ語による吹き替えを選択する者が挙げた理由についてもいえる。つまりテレビで外国映画を視聴する際の言語選択に関しては、日本アニメを視聴する際に重視された「面白さ」や「身近さ」、「愛嬌」といった点はあまり重視されず、内容が理解できることが重視されているようである。また、「多くの外国映画がカスティーリャ語に吹き替えられて放映されている」ため「習慣的にカスティーリャ語吹き替えで見ている」者が多くなっている。

保護者世代が挙げた理由の中には、「英語の人物名とガリシア語は合わないから」や「アメリカ人はガリシア語を話さないから」、あるいは「ガリシア語は現代的なものには適さないから」といったものがあつた。これらには彼らがガリシア語に対して抱くイメージが表れていて大変興味深い。生徒世代にも同

²³ 生徒世代の82.9%（944人）、保護者世代の76.6%（653人）。

様に、「カスティーリャ語の方がアメリカ映画に適しているから」という理由を挙げている者がいた。このことから、ガリシアの人々の中には、「アメリカ的なもの」や「現代的なもの」を表すにはガリシア語は適さないと考えている者がいることがわかる。

つまり、ガリシア語復興政策により、ガリシア語の使用が拡大し、教育で使われるようになり、マスメディアでの使用もある程度定着してきたとはいえ、ガリシア語に対する否定的なイメージは依然それほど改善していないのである。

4. 結 論

本調査の結果、一連のガリシア語復興政策により、ガリシア語の使用が拡大し、ある程度定着しつつあることが明らかになった。そして、テレビなどのマスメディアにおけるガリシア語使用も拡大し、ガリシア語復興政策に大きな役割を果たしていることを確認した。そして本稿は、筆者が行ったアンケート調査の結果を分析することにより、若者に人気があるコンテンツである日本アニメのガリシア語吹き替えが、若者のガリシア語使用の促進とガリシア語に対するイメージ改善において、大きな可能性を秘めていることも指摘した。

しかし、ガリシア語吹き替え放送で成功しているのが、日本アニメのみであり、外国映画の吹き替えなどでは、圧倒的にカスティーリャ語使用が好まれている実態も明らかになった。ガリシア語に対するイメージを改善するには、「子供向け」と考えられている日本アニメだけではなく、ガリシア自治州で視聴できるテレビ番組の大部分を占めている外国映画の放映などにおいても、ガリシア語吹き替えを増やすべきである。そして、ガリシア語吹き替えが「当たり前」の存在になるようにしなければガリシア語に対するイメージの改善は進まないだろう。それと同時に、ガリシア語による吹き替えが成功しているといえる日本アニメを有効に活用し、ガリシア語復興政策の中心に据えることも考えるべきである。つまり、「子供向け」と考えられがちな日本アニメに対する

イメージを改善し、アメリカ映画などと同等に「大人も楽しめる娯楽作品」としての地位を確立できるよう、芸術性やストーリー性の高い作品など、より幅広いジャンルの作品を紹介していくのである。そうすることにより、子供の時にガリシア語に吹き替えられた日本アニメに親しんだ世代が、抵抗なく多くの日本アニメに触れ、その吹き替えで使用されるガリシア語に対するイメージを改善させていくことができるかもしれない。

参考文献

- 柿原武史 (2006) 『スペイン・ガリシア自治州における言語復興政策』 大阪大学大学院言語文化研究科博士学位論文。
- (2007) 「スペイン・ガリシア自治州における二言語併用と言語教育政策についての一考察」『多言語社会研究会 年報』第3号, 多言語社会研究会, 32-49.
- 経済産業省 (2004) 『日本コンテンツの国際展開に向けて』
 <<http://www.kantei.go.jp/jp/singi/bunka/dai3/3siryou7.pdf>> (2007/09/06)
- AIMC. (2005) "Ranking de Medios Impresos." EGM: abril 2004- marzo 2005. Asociación para la investigación de medios de comunicación.
 <<http://www.aimc.es>> (2005/06/10).
- Goyanes Vilar, Helena et al. (1996) *A información en galego*. Santiago: Lea Edicións.
- IGE. (2005) *Información estatística por temas, Indicadores sociais, cultura e ocio*. Instituto Galego de Estatística.
 <<http://www.ige.xunta.es/ga/index.htm>> (2005/06/10).
- Maneiro Vila, Arturo. (1993) *A influencia da TVG na promoción do galego (Comunicación : 8)*. Santiago: Edicións LEA.
- Portas Fernández, M. (1997) *Lingua e sociedade na Galiza*. A Coruña: BAHIA Edicións.
- Seminario de Sociolingüística. (1994) *Lingua inicial e competencia lingüística en Galicia*. A Coruña: Real Academia Galega.
- . (1995) *Usos lingüísticos en Galicia*. A Coruña: Real Academia Galega.

Siguan, Miquel. (2001) *Bilingüismo y lenguas en contacto*. Madrid: Alianza.

Xunta de Galicia. (1991) *Mapa cultural de Galicia III, Enquisa sobre hábitos culturais dos galegos*. Santiago de Compostela: Consellería de Cultura.